

論壇

津波逃れた「釜石の奇跡」

先日、岩手県釜石市の「うのすまい・トモス」という震災メモリアルパークを見学する機会があった。7年以上も関わってきた政府の復興推進委員会の仕事で毎年、岩手、宮城、福島の子県でいろいろな現場を訪れてきたが、今回もそうした活動の一つだ。

東日本大震災が起きてからもうすぐ10年になるうとしてゐる。原発事故が起きた福島県ではまだ帰還が困難な地区があり復興途上にあるが、岩手県や宮城県では7年前に私が見た景色とは随分変わった。鉄道や道路などの復旧が進み、

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

震災記憶の伝承

地面の高さをあげるかさ上げの大規模な工事もほぼ完成している。時間がたつにつれて震災復興の重点も移りつつある。土木工事などは終わりに近づいているが、新しいコミュニティの中で生活を

はじめた人々の心のケア、生活を支えるために必要な地域産業の復興など、釜石市の鶴住居(うのすまい)地区については聞いたことがある人もい

る。道路や住宅などのインフラは復興が進んでも、人々の生活を元に戻すのは簡単なことではない。そうした中で、被災地の各地域が力を入れている活動の一つが震災の記憶と記録を未来に伝えていくという活動だ。今回訪問したうのすまい・トモスという施設も

学校生徒たちが自力で高台に避難していった、津波の被害による死者を出さなかったのだ。テレビなどでは「釜石の奇跡」と報道されていたようだが、三陸の多くの地域で津波で多くの人が亡くなっている中で、この釜石東中学校の出来事は奇跡と称賛すべきことなのだ。

うのすまい・トモスで私たちに館内の案内をしてくれたのは、震災のときに中学生でこの自力避難を経験した女性職員だった。当日中学生だった人がもう立派な成人になって震災の経験を語ってくれたのだ。実際に津波を経験した人の話であるので心に訴えるものがある。

「死者ゼロ」は準備の結果

彼女が強調していたのは、この地域が日頃から津波への対応の準備をしっかりとやってきたことで、死者ゼロはそうした日頃の準備の結果であるということだ。「釜石の奇跡」というのではなく、しっかりと準備をしてきた結果であるということを強調していた。

地域地図や津波の状況を見ながら当事者である当日の中学生だった人の話を聞くと、日頃からの災害への備えの重要性がよく分かる。地震や津波だけではなく、大水や土砂崩れや火災など、災害はいつどのような形で起こるのか分からない。だからこそ、何かが起きた時、自分はどういう行動をするのか日頃から訓練をすることが必要である。人間というのはいざとなるとなかなか冷静に行動できないものだ。日頃から訓練などして体を動かすことが大切なのだ。

静岡県も大震災が来ると言われて久しい。そのための準備や訓練を各地域で行ってきた。ただ、時間が経過すると緊張感も緩むものだ。災害とは案外そうした心の隙をついた時期にやってくるものだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。